

長引くコロナ禍がもたらすもの

北陸信越工学教育協会 会長
福井大学 工学部長

福 井 一 俊

色々あって随分昔に感じますが、日本の大学が本格的にコロナ禍対応を始めたのはたぶん 2020 年の 1 月ごろからだだったと思います。それから約 2 年が経っても感染は収まる気配がありませんが、一方大学教育におけるコロナ対応はなんとなくこなれてきているように思います(もちろん気を抜いてはいけません)。逆に言えば、この 2 年は大変苦勞してきたということですので、このタイミングで工業教育であろうとなかろうと「教育」に関して何かを書こうと思うと、どうしてもコロナ禍とそれへの対応でクローズアップされたリモート教育等々ネットを介した教育に触れざるを得なくなります。

パンデミックによって強制的にリモート授業をほぼ全員の教員が急遽実施したため、悪いところも多々出ましたが、リモート授業の良いところも経験したため、現場からは大人数教育などではむしろリモート授業の方が向いているのではないかとの声が結構聞こえてきています。また、私もオンデマンド型でリモート授業を実施してまず最初に思ったのは、これで試してみたかった反転授業が現実的になったなということでした。大人数の対面型授業は教室のコロナ対応定員では収容できない物理的問題があるため、この状況下ではどちらにしてもリモート授業が 3 年目も継続されそうです。さすがに 3 年も続くと、良い評価もあり、リモートや対面とのハイブリッド型など新たな授業が本格的に定着すると思っています。

ところで、学校とはほぼ特定の年齢の学生が毎年通り過ぎて行くところですので、教職員は世代の違いを定点観測しているようなものです。ここからはまったく個人的な見解となりますが、学生の世代による気質の変化は意外と明瞭で、新旧世代が混在するのはほんの数学年の間だと感じています。それでも大学という場所に共に集うことによってか、または大学に限らず学校の特徴であるタイトなスケジュール(カリキュラム)に助けられてか、大学というシステムにシームレスに適合していくと感じていました(もちろん大学の方も少しずつ変わってきていますが)。今、3 年目もコロナ対応となれば、卒研着手前学生はほぼコロナ禍以前の大学を知らない学生ばかりとなります。つまり、半ば強制的に、学生相互が断絶された形の世代交代がもしかすると生じたのかもしれない。大学における **with** コロナや **after** コロナは、上述したように授業形態の変化などコロナ禍の直接的な作用によることは間違いありませんが、もしこの種の世代交代が生じているとすると、大学というシステムに対しどの程度の規模なのか、どこにどのように波及しているのか、私たちは向き合っていくことになるのだと思います。